う津保物語

梅の花かさ

六 さかのゐん 並一

特別
へ12
4327
6

アテ宮只ハコソ十丁裏
目ニシメニ法哥廿七ウ
オモトン十三ウ
古近少おるたよう十九ウ
ノリユミニミソメノ丁

梅花笠の事 シス
中只ハノ侍従十八ウ

173

当巻梅花笠法ハ三丁ヌ多紙仁書立よれハ梅の花
笠ニミトよ見ゆる事ヨリ出タル名△一名春日詣ハ初
丁ヨリ十七丁乃ニテ専ソノ丁之△サカノ井ニトアルハ非ナリ
コハ紺本表紙ヲタカ
ヘタルナリ

紺本ニ付巻ヲさうの花
トかゝるハ只標題をおし
誤りたるへし

今本梅花笠之白本 梅花笠一名春日詣 紺本さがののん

かくて御よゝ月よりそれ河のみこともおはしける
給ふみかどの御時に世中をいとなみ給ふ
おはしましてあまたの御子たち女みこ源
氏になしたてまつりておほくの家まうけしたまへる
よ源氏ありてかずかぎりなくそのまうの給ひんと
ていかの世給ありんとも心ざしふかくありしかば
ものゝ人のさうぞくして世になれしきき
よりの君の人々あまたありて源河のみかど
に御たちまつりのすゝとのゝ人の心さしをはし
て童どもあまたありてみへ人々上達部千人
の人々へいしう千人かの人ゝ十人あしつかはしける

かなひしもつて一本童下仕ト出リ童ハコノ物カタリニテハワラハトヨム例ヘサテウ我ヒハうる世ノ誤ナケリ

門 へ13 號 4327 冊 6

昭和廿三年二月一日寄 高田早苗

まひ人いよのかみ、れきんたちら衛士人よりうち御さんへさち
よろうつめくるよの中に名たゝさいらとられ物とも。
せんおゝくらへいさうぬも唐よりもて袋あ人しみ女
すいせうりて女いゆくしお早人ゝそへ大人しもつゝへ
女人さゝえくいかるはお袋文れゝるぬらさうつ
あゝいつよ出こうのうらま作とたゝへいわ袋にもや
すいさうそふろうらふ出されしもうゝへ大蔵れらくう
それ十る蔵のたらゝいちこをつゝへ毎をほうしくも
そこ日とくえくひ申かうて二月廿日よりみかそ
給ぶるきんくるかきもをも袋ゆのそをも袋くう。
いとけよ袋よいるあるりつめくそてまうて女みとに

ちあかきこえすこゑかさおかしきこゑすてくれける女
御の君とはあやしくすゝれたる物ともきたりきてとうちはかう
うくわうゑ乃らふれ御袴よ、綾のちもうつのえくたり
此文の御かうすなくれうらくさき袴をひらう日綾うを
もゑかひえかりいはんつのうちそよるひゝひつしゆ
ひくしまふ小袖もちつくへんかちちらかひそを
まし六人かたよのうへれこゑあえく御布しやかんくるか
されいのさしは十八人あ衣かさ六人たよまの
あゆしぬひねのいろとのへきちよの中にあるもと
そうんさらめみとそらよりつめさそまうりく。
山のかみまてうふの御よもふつうまうしぬか

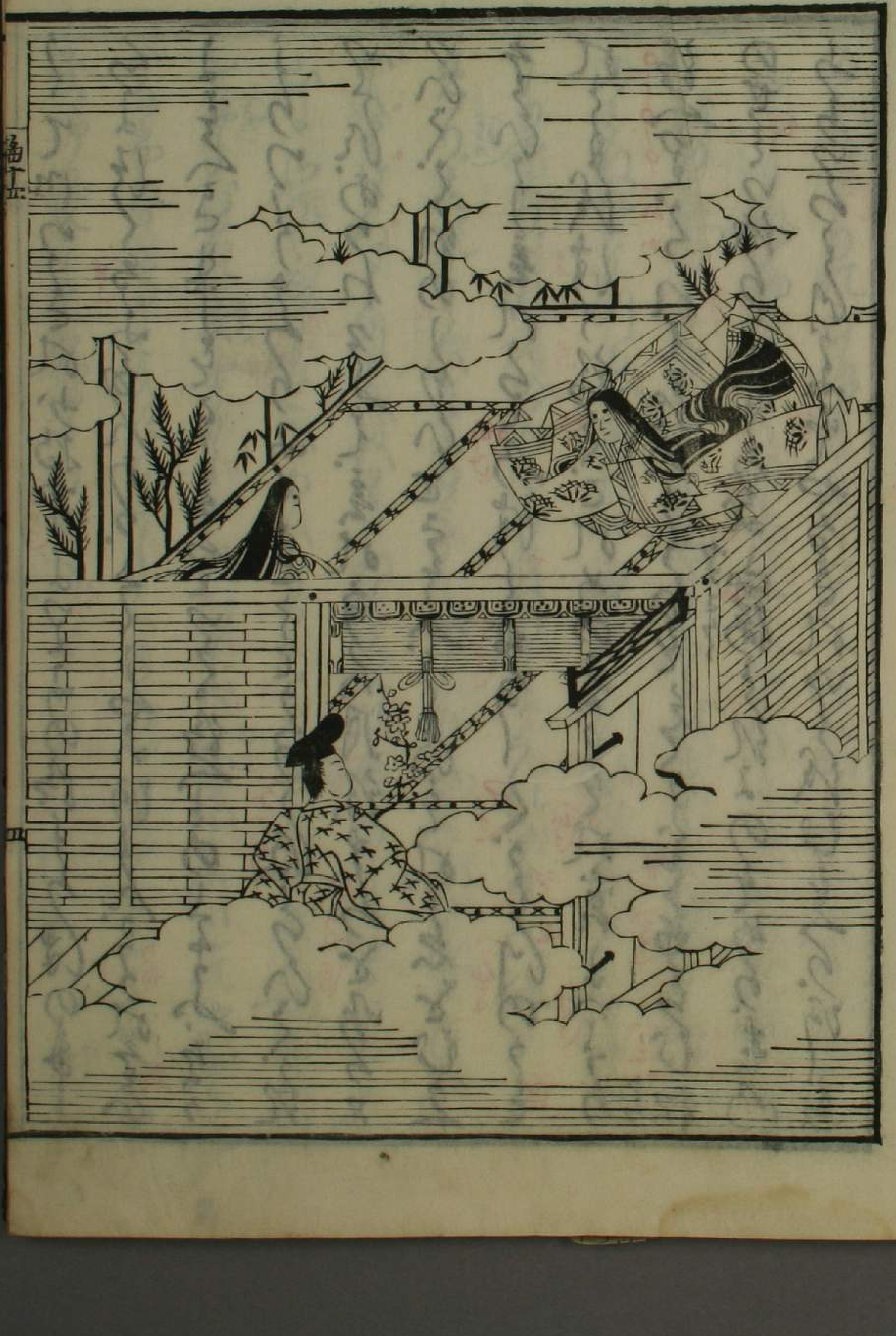
ゑがハ　垣下ヘ

ぐ 一本神楽トアリ 紳本同

しも大宮のみはらからくらう給ふくてこやし給へり
まて侍れ給ふくわうにくのけはらくらくして心
らう屋より給ふ地とこそんちつきさすみ給ぬふ川の
時つりよりぐくとしまりてさうの時とらみそぬ
まひ人女のさうそくひとまそひ侍く給ふ屋ひさう
よい採女のおやれかうたう一うされおつ給ひ兄う屋
ひとくて給ふ兄うふれたしさうんくよおやくさま
の女れさうそくひとくてめ信ともうきをいさうな
しらうち屋をなん給ふ君家のこうちもなくう川さ
おくろとみ重いれ紙めくさ絶えしたるめうよなん
えくきうくろよかしくんくよおやしく所しえん

こそこころせ 一本こそこころセトス 紳本同

給ふすよかりしろく其うわか一所いこれ侍社ふかん
あつ地へしくきうさされとてこゑ山くのいるうけ給
つくくかすろくなん兄更うとの給ふ其ア文篤よ
さをつしまれ宮なりこの家ふさうく給ひとこそ
上ごゑ也そうぢうらよもこししいわやしくとしいろ
こそくさきれれとてさ紙かすしく思くをうちえ
かもえいうかこれめかなくなうとくるうとる家人
なしの給ふおうしの母くうひてまさうとこれ
ゑみやさく給ふうるれえやさよ木山もうつ侍く
うひせさうんやいかとの給ふうる給よ君敷いのみと
かりうきむかしの花をかざし給ふくちんのかのと



はからひ給へ。花のえてよめまゐらせ給ふくれ
つけて、おそ文のかへりとおもふてまゐらす
兵部卿宮
きらされハ梅の花さかりなるを折まゐらせ人ハ
らうあまにそり、さ治ハ娘と紫山にと云給へは
ふかりのをとて、さとくまつ猶給へ。おそ文み給て
このむしつけるむかしせ給へ、それにしふかき
ませさうぬともそへてくえつきゐ給ふ
くれさうみつき此山のこのむしハ花の娘花や
ぬうとつらん

くてはつきのかね中よりこの[illegible]らくはの中
もよほしくかんおりてやいはへんになりての[illegible]
よきくさ[illegible]しそらしそ[illegible]つくよのにはのふ[illegible]
まつつゆかりみくさことゝるの[illegible]らひくかれ
いつれおりれなふそ春のかすみの月をすみつをかつと
ひくかれのしかひとさそふくひをとれなさむ人
春ひり春のうこ[illegible]はしか[illegible]くかりのさき
れとも紙はしおくこれぬの春うこれ宮よへかり
後へ[illegible]かれも花のうひをえそよせらむ松
のせくは御かよ出ろまに山桜と紙よのそめり春の
かりかるかふに[illegible]やるさかれいと紙ひとへりはり鳥

の霧たちのにほひもかすみ夕への雲とさかりみしさ也
山さくら梅ゆたくの色の香をふりかふをみなら
ひ香の色かはるをとらしやそちる紙さく山の雪
のこれをかはして雪の下草のさゆるものとくの花さ
かたかりこれかのみをりほのよくれかみの梅さく
絶りて春のしらひよ雪きえていしのひよくりうとくれ
わきぬかぬか川春の紙とこめる花の色にほひたる人
山よはつくにさくの世にかひろえてかよりさくらふきの春
を出しむ花のるをかるにいはしに秋の紙手はこの紫の色を
いかなるとうれしくして君歌のみことよそてある
かな御後しして[illegible]まちの月を

朱雀院御製

かすみ[illegible]さくらぬ
一本なき[illegible]さくらぬトス

はるゝ霧も端山かゝれゝ(?)夕の月
といふかひなしと秋の中つかさにもよたく
まゝりなる中つかさのみこ花はいさゝかに
わか宿よう(?)てしれのこのよそ見れとも河
ゑる(?)よりのと。鶯のみこそ鶯とむかふ
さかりよ咲花ようつして行く山よ梢よとく散る
うくひすの(?)あさはかりれたゝいろの浪

正頼
梅か里ふもとのさとの雲はらいそて雲
ときさくらいや。花はねらぬ河のこと
春雨のつゝ梅の河かなる河もなかりける河や

篤雅
いくかやまあらん。ふもとのこれめの春

篤雅
松の梢よ梅は山人のへとあらしまふうやうき
の梅みをまさらんと。風の原さね雪とき日れるや

実雅
しらん人のさいろ見えへすれく松のも花乃
花そよ花はし。春風のあと散原とよとさ花先
くひそ

清正
梅さしこそいもせつくめの鶯れとさてとせさい
香をそらしまれ。中納言平のさくら河かうて松のせき

正明
松風の中をさらし梅かえの梢とさらさする
せきいへ色さとめや。大弁源のさとさき花残
さてら草

忠純
若竹の梢よ春の草木の中をさらいろの色と人

春ノ雨声出ト云題上ノ目録ニナシ

風ヲソレトス題言上ノ目録ニナシ又哥ニモ風ノナシ風ハ花ナトノ書誤ニヤ

ヨヒサレソムルハハヒサレソムルノ誤ナル本居

やむことなき人〻よみてさくらのうたすすめられけるに
めしけるに左近中将のもとにつかはしける
なかるかへし

師純

松にもみひらけてこそ花のにほひもあるかし
のあるとこそあれはしらぬ中納言もとより梅の花はかはらすをしむ
とこそかすまゆき

基行

花さかぬものゆゑにをしむかはかりやすきもの
いとまなき宿にはなれて春の風のにほひにしも

実忠

花をかせにふきなせそ春の風

声出

津にもいとほしみやすみつるをりふしの花の松へ

スケアキラトセルハスケスミノ誤ナルヘシ具放ハスケアキラト云人他巻ニモナカリシトアホエ

長義トアル注ハ非ニ永頼ニ

さほ姫やわかるらん春の雉子にさそはれぬ梅の
のこるねにそのはなさくらの人の家にありてめつらしき物
人より給はりて左中将さねよりのもとへ
さほ姫のにほひをそむくるにもわかるらん

実頼

ちかそうかな
春ちかくもの心のとけき梅の花のかすみ
もとかくもかはらぬ春のかねよりもかはらぬ花の露み

長義

よりたり

永頼

鶯のなくせきに春日山のかすみのこゑも
きえゆかむとしかかるにもかねをまつりのこさ

元方

出てはよしの風の花のしらみのよはさかふしよ

一さる姫やかくるらんとよめるにはさる姫にしらむを云かるゝ歌にしをりしき

ヨヒサシソムルハハヒサシソムルノ誤ナ　本居

○春ノ雨声山テト云題上ノ目録ニナシ

○風オソシト云題言上ノ目録ニテ又哥ニモ風ノ事ナシ風ハ花ナトノ書誤ニヤ

やよひころ人〻花見にまかりてさくらを折てよみて
めおこせて侍ける左近中将にて侍けるをきゝて
たる歌　師純
松かけもちるかたそ雪の花は風にしたかひ
のかたてこそ中納言の花はちるとも風ゆるさむ
とおもふかなすなし　基行
花さくらぬるとかもてかへらむ一さかりやすきかれ
はなもちそろひさかしく宰相さねかた吉野山の花こそは
て　実忠
花をゆきとしらふそむる吉野山かくれ行松は
津にてみるらんさいやさる雲ふき風吹そく

長義トアル注ハ非ニ永頼ニ

さほ姫やかくるらん吉の雅よむれくさかぬ梅
のこゝろねたむとそ見ゆる人の宮仕よりこめたれ
人〻絡まかりてたる中納言はちるさくらしか
さほ姫のおれくふそむる桜りいはふこそむ
ろ梅ちそくほしみ　実頼
ふるさとのとりもふくたち梅の花ちりかすく
もゆるかなふかく流かわたる左ちりし花の露み
よりなり　長義
鶯のこゑせしもとも吉野山のこゝろも
きさかりのみ川ともやのしらかねまくさくらのかみさ
此母のよ風の折りしくみるれをいつふよ　元方

またくもそかゝらましかはしきかねてきねえ
らく春の程

みなこそ雪ふる山とおもふらめ乃
わかみのかひりきえぬるしものすけあれはそ雪
ところにも山

花しの緑へたまつれ春をまちそよみくらのこれ雪
をいまいつ庭に霜ふらんかすのしこゆきやさき雪れしき第

雪のうちにあかく花木れをかれしや春日ゆと
あひあことうつらん君少将かねこゝうへ
のか

うちそれて雪まにかへしけるをいのもりはらんさ

やらふつまんとは待渡るらぬみよ川かるらこれや

春をはさえのくれこのめもとまらてむさといはこ
まちつゝむらなくらきんかはしき待渡る雪ゆきさ

紅の梅

春風のならふにく紅そめくらむしく
春風ににほふ梅花のかそうていまさ香紋

雪

雪とのみ春のこゝいれは色をかやのへ待花見れ
なかるらんかそかねとてれいしのなよまる氷
春わたる河なへのあしの色えいしまちつる
此いりなんは待渡みれはせとぬとさるらん松

さくもそかゝるゝらしかすしさかねたまね冬
ららく春哉経

みなかくこそしも雪ふる山をあらまの花咲色乃
わかるのかくりきられさえんのすゑかへそ雪
とふ川を山

明純
春しの緑乃くきろれ春をまそよみくらのこれ雪
をいさ花を西んかすしさゆふかさ雪れ志さ草

行正
雪のえよ春わらく花木れを西れらや春日乃と
あひあるとふうん言ひやサ将かねもさ志とのえへ
のあ

兼純
うきうれく雪ふかくしろゝすをいのあるかはんき

やゝふつまんとへ給絵あうとみ川かるすこれや

仲純
春をはさえのへれこのめをおうてふとくいはこ
まきつむらうあなりきん比すしさ給経源手にゝ
紅の梅

春每のなみかりをくしえそめくくらむくし
春れさやいめ給経御京のあうてもくいはき西經
雪

仲忠
雪とふう春のらいれう西道うやのへ乃萬木れ
かうのうん志くうねとれいしの氷はよきう氷
春わらさ西う河邊のありの色いはしき山う
火うるやの西ん給経かれゆせとれとさうらね松

かゝる人のおもひハる世の外なりけりやみよりの松
ハ春ちかきんとりそ川春ちかきさかる花
ちらしやこの桜ハよそにちらんとも花にも
春をまちれハこそはちらめ人にみゆる人

親純（正頼ノ十一郎）
春雨のみえさえの芽もひかりしハ梅をこそ
のこしわかなつむ人の春さきの野にまさるらん山まさり
しらん

清純（正頼ノ九郎）
見えまさる草木もわかぬ春人よハ山道かい
そろかそまむらしたる野ふかれ松風りまち

さくら枝
頼純（正頼ノ十郎）
常なきのこる露や春そいつ方のまひゆる

やまさなからん谷の人あまたかる露まて志ぐれふ
草
春雨の雨のせかる人の草木とや秋の中より
ともいつのまん。わくのまけられもし春待れし（木工）
早花
さくら姫かゝる野の春待かしそいりそめつゝそ
花の八重ま咲らん。草木の世まで雨春ちまさ秋を
まつこの里
春わたる野のふる雨わかれのよハ秋そいとく
末くにえてふる。あやのせ見えよりいかなりかる夜（松方）
とりまかれる

五十丁三ノ左ヘ又月此題上ノ目録ニナシ
ロオクレタルヒニ亦目録ニナシ
イカナル題ニカ考ヘシ

松方

夏山の木の緑のせみハもえとくこ葉のこ
ぬれやむひしかるらん左兵衛督阿さつるの時るを　時景
冬の夜はみなかくる
冬山のともくひしらもくさむことまのさとし　至イ
まや岸しらさるらん右兵衛督せつりしとをはやとゐよ　尉
ゐそらぬ月
わすとも九世人乃里とゐよとらすいとおり　尉
なくしかなきのひら月出るしむせう平の宮とけ
とられたるひま
わさゝけにてるかふみ里の山のそにのとれ出月
ともれしらす利なとこれの里の森くけらめかなれ

ゐこかせ後撰ノ巻上ノ十八丁又ニカタチ乱トアリ

よ安くこの浦ちえよ及そこらものゝ緑さわの浦そ
わそくれぬらふあらくさかれ一条をのをかられさ　左大臣忠経　かイ　買
忠社巻廿三ヱ
かなとかせとりふ絶にれこ思りかくのてよりぬめ　とこか　胡笳之声
くらゆとりふそゆるらへしはそのすらそくおもを　手　子イ
なおゆかんことうかをこうまとにるくそあんなる　よイ
いろうるらん世まふもつくす手つうゆそゆるらんなとくふら
いそくみくるひくる絶よりれゆてそれもとこるさへとゝ　千薦ノ子
めうし姥山よ母冊のうる三絶をかくてちきく
うけ字あまいら衆しきやかとけらゆくし人
よりのもいそてこかそけのにことされ緑をとゞ
ならあそひみとまつむとまふされ津緑し人つうて

なちしやにて法華をよくさとりけるひしりありけるそ
まことをみなからけくらふ山をかさねられたる所よ
て六十余らふをかさねてとくきやうしてそてゆる
まそちらうさ所をうつらよこれかすかのみ衛にて
一まん[illegible]

いまは海のほとりにていつよこの仙人ゆくはおそ
きの仙人ゆやとの孫なりけるかしらぬくもおもひ
とりてたちまちに紐くてみちはなしくのおもてをま
といふこれをしらずしてふたらさつくへらゆせ
まする花の井に見るかせよりなかくちらのとおち海
さまとくゆらさくまからてあゆくり路をいたさん
とねりともあれはいつかたの地とまする人をかわきさ
の雨よそいつくら色もものゝうへとかやらとしれはは
うくひてゐたり
めでたくかくせのあてゆかこの孫なく山人の神
ととあひとふくをなかくぬくまてはてきくあるりの

かみそておとこめをぬきてうくひてゐたく
見えする人にもろもなさけも松風のひゝきさち
まかる人やあつかひてちるの地ゆくせんにんへらるお
のよそてうせを路まくはかりにし海の思ひそつ
してありりそて行しまへ地の人よりてまへわか海
ち思ふをとよ仙人てつりこ人で路をとふおもさ
うちへつゝうゆふくぬ袖かくきれは表もあれ人
のかりうへしめうりしうまうは地はりきれはか人
のみて路のあそんは仙かせ今袖をふ路ゆりて路は
ぬまは地とるよ人のかわよりてありし梅まさをさな
らいうく人をちら子すまよて仲よあんるとらひて

ら御のてうどもおさ〳〵つくりてとも〳〵右大将の君おやう
いとらのしろきひとへ御ぞみえさせたまふとらさひ
とりまかせね。おりものゝ御ひとへ。ゐかんやんしりそてい
て。おりたてよし御ぞぬぎてかつけ給ふ人とめ
しいそくえん給はぬはらんせし人にかはりてしもやしと
てかうしつ給つる人とかはりいつるよ。かのことそよたし
をくおやしくらえてまうりしくらこそかうかりまゝ
さうりとい給しめしてやとの給。おとこかいへさう
よおろさそてあへこと。なんれいのかけりまへるゝむ。かはと
とむしとに蔵人少将と〳〵でつまして侍ふくみ
しまへ故左大いしれて御息とおかんえてそまとはり

えうへ一本御あのうへトス
他本御みうへトス

たちゝ母いるころ
只今ハ納言ト云ニヤ

御ゑあやしみし居たりしう御かへりをといへるに給ふ
みなの給ふくこゝそ御かへりくしらかりこゝのかへし
つきくとりふくのれなりつかはれにいはらんしと鳥獣よ
ちうんとかんおもひ給へふぞしおもふと御山本しよな
つそてなんおはしみいそぎの御位まかふか御心もろん。
さくしらい御いかとこゝろえてあん給ふおもやとしこゝ
いさよなり給ふかふんとも給つるにしうくあるくみそ
たまのし給そせえぞくいふすりけもとあらくなくつく
ゆかしえもとつゞきんかとをはしへきしこそてあそや
ので御かみすれとそれ中よ給しまくうくはかりえ
待うて、さるく一人給こなりわやれのへをとるる

ち海のてらもかきこえたるてとゝにおほきおとゞの君おやゝ
いはやのしろもひとつのみえさせたまへとこひ
とうきね、おほ色れたる海ひく、かわんかへいりそてい
てくるうたくよし海のうへ、かくかとあるひ人とめ
しそくれ給よけらんせし人になりえしらおやしと
てかくし給つる人をかりいつるよ、かへることよたし
すしくおやしくゑくそてまりしくらこそあかけまは
さもらをいたる給しやしもの給をとるひ人さう
よらてそてまうきをまされなるかりしまくならむかと
とむしとみ前京着とも御しまうくろ
しまへ大大いしみくかき君となんえんそてもはり

えうへ一本御前のうへトス
或本御みうへトス

ゆるあかいみし屋るしう御かなん弟とはうなり給門
るしの給かくこそは海のくしらもさきのみちし
つらくとしかさしくまりわれいはらんしもさま
しうんとなんむは給へふそしとろと御山あしまな
つそてなんおくさみいすみの四位ふかおりし海しなん
かくしらう海いたさろふなん給あらおやとしさろ
いふよおう給ふぬんかゝ給つるけりくさうよそ
たゝの給それぞきくいふるれゝよくふさらふく
かれしやらつらんかとるひ人さしいらくこそめどや
のて給らえするくまれ中よ給しよくらうくかわえ
給しくさまう一人給をさうおやれをえゝくへとさう

彼女刀自をも尊みんとてん
道尊おさくまたくか
一本まゝくにアリ

てはしんやつらくて、かく親ものしらひ給ひしみぐるしく給へし
か、孫んしおまつりくかん、十四五ばかりにてかんさから
こともなくて二十年ばかり御なからひたえずもなくて
みぐるしくなりしよ御からうして事一生のみるまいひ
ろう見て侍しかは前世の罪業なりくおかるきかんふ
のかれうしきを人からんとて、おぼつくをたちそれ
こまかひゆかり給はまくとそしく給ふ大将君やうれ
しかさてやまうておかうと給ふ人すきさきたき
人のすへ、大将の君は後の君さいさうかへりなき
ともかくなりて給世をそんとんとるんとはうらし
よの中のくけるみきれてそ、意しくぬわくつ也

かもりされなりひをところめくさくめあえ給ふ。
ねくくいそこみとのせをそすり給よもろ、文の日より
なりしまらひてぞ、それなりんやすまひまちてぞく
ひなりくなら給、されなりやよ思くまたくまろう給
てこそうく御みちよハなりきらく海しくし、なりやもそ
よせひよ女給つをてなられく、不孝てくのつこと
やすらうんとすむ、とこるひ人世中の世にめくくなり
それはいかやのもんくゑ御ふ給まぬをのりするむ給
つきもろ、なりやよろくしめくるはゆかうちくく給しく、
山ろやしよゐいそそく御からのくみかうら、大将君
なりんきんるくいはくそのし給くんり、ちまきらり

道九ヶ日まさくハまたくヵ
一本ままく匹アリ

てゆるしんやりてて、かつしらはらひ給ひ、みかとく給ひ
みゆ、猶ゆんしわまつりくるらん、十四歳ふくるらんさうち
こともしらすして二十年みすん給ふめるをしりもくて
みくれたりしよ御らんせし事、一生のあるまじひ
りきて侍しは、前生の罪業なりくおもひわきさんか
のれりしをも人ちかんとておもくとたちてれ
こまひゆうら給はてくとるして給へは、大将殿よりも
しかさてかまりておかりとはかへ人すそさゆとさも
人のすゝ、大将の君は御かんのちさいさうさ御らりたる
ともうくなりし給世をそむきんとおもふるんとおもふるもの
まの中のくるみきれいてそ、まことにつらくぬわくりの宮

のもりされおりは屋しまくしわめくるおかえ給まし。
れをもいそこふ物のせさてなり給はまらん、文の日より
おりしゆうむひて、それおかんやせまひらまかるて、いと
ひかくなら給、千景れおやよそして参りたまつりて給
てこそう御みちよは、おりくしく御覧しておやもそ
よそひよりて給ひてなりなむかくしく御返事不孝もゝのことと
やすりんとなるにのこすひ人世中の世のやくなり
れはいわやのかくりましか給はぬとのりまむ御
たまさる、おやもあるくめしまはゆるさうなく給しの
山ろやしまんいそそく御らむらかりにて大将殿
おかんもんまていけるそのし給らんり、まさあり

ゑましうぬこともの(き)やよるんたらそて給へいと
まよはうろ母子あん内よさふくぬ君もらおるゝか
さめされるしろをわくそいさしろふんくるか
ん。ゆうさぬおるるとそ(ぶ)しるるあんちうすまい
うちつまうらいとくゝ給要るされるあんとちろ
しき母いそしるんもくい延命めいそくさいとむねとし
て。ことよちれていのれしらよをそれ色ろすきこと
をれ祈せさ物まへ。其するいのちれさうりい人のをを
そるすことを。いく給ふぬりのすりぶのはらあち附
るんとのくさうつきると家身のやうさ。をあわりと
を。はらしみ給あん。よれまするれん。いとよく祈願

おはしまさるやう
こまひ人

しや給へん。母くい海のくまのみやうらつうおらこ
それ八月まち祈くふて熊野詣をそてやまつりおちり。そのをや
しろうをさくまでけさとわやしくむりうを
給ちりしものくおみし給れい。身銭へてをとうゆし
おやのこゝるをく給づんへを給ちはけくあん祈
のけらくにはうこうんよ其の光んまくりぬるか。大ねまい
さよりもかふこれをやしろよ神馬ちをそてまつり
せんとくあん給ふるれくうり此さい給いつをて。そうし
あろれ物をりをさらしさせてし。れ。其するいとく
海の人にいそれやうりいあるろ河をあり川をまたちり
其はみちもをけしきれ宮の月そちりまあんさう

あし乙ハあな[illegible]

[illegible]

宮には[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

正頼

故
嵯峨院
忠社 巻廿一ウ

こ院は[illegible]

[illegible]

[illegible]

を脱[illegible]

人[illegible]

いはれそ 一本かはみあトス
絆本 いるはトス

おいれ給 一本三給トス
絆本同

正頼

正頼 さく イ

忠社

忠社

上ノ二十ヲ

忠社

[illegible]

マツカゲニヒモト

とのかへり　一本その日　紹本同

右近少将ハ永頼カト思ヘト
イサヽカ心ユカスタリ可考
下十九ウ右近少将トアルハ
永頼ノ之

てたうさりけるむかしこのかゝる事まことに世中よな
ゑあらましかは夜はあかされとたらは
ましかはとなむされとまことにしられ侍りし
も。常ならぬ秣ともしれぬかみのはりはくち
るいのよけよのまゝえんとそはこそのかゝる事
らぬるをかくらよま秣をてしてめみこれは
備のゆかさんともなくゝてゝゆりいゝせとも。
せんとさゝりはゆかゆまはさらゆゝるゝれはら
よ。は侍もとしらさきうしおやしてくれて
忠社
うれ世をていはめる山紙あらゆくいはよせま
とらいまともし。あらくれつまろくこえんうされ

はやくのさまとくれらうよらしはけてあらぬくぬ
のへともしらをもてもていへこのもりみしくとえ
とさふみあくて。ならぬ山りゝうてもゐるあく
まもはりあれくて　大三日のかくしの付うり
よふんかすうり給をあり。ゆくりあらしいゝめ
しくまゆくいりきゆなさしあやのあはせれあこ
めひくふりよかそのさよゆうゝうしらゆへ
いとゆるとゆをなあふくて三月れありれさえよ
やるあむゆりれゆつもゝく右近少将をれつらうり
おかくをゆうしゆかりもれとゆるゝへとうはぬゑ
あうらゆるこれも給よゝりとゆへくゆりゆゆあるし

春日　一童　袴　陪従　従

とのゝへり
一本その日
細本同

てものしけるは、むかしものいひしをきて、世中よな
とあはしかりしを、いまはまたくるふることもなかりし
ましうるとものされとまことあらんれとしこと雲かし
も、蛇のこのはらをとられゐしゆく。わか腹のうちなる
るいのとりけよのまゐんとそ、ほとものゝかんまする
らぬるすをいふかよき様をて、はとめうこそはなる。
佛のゆめをも用ゐるへしや、用ゐるましやと、さためよとなむ。
せんくさしく仏ゆめもはちらきつるも見ゆる
よ、はせまもとよらちをさしあやしそくなしつ
う紀世とそいつめる山緑あるみなしいかよせま
とのはきとる忠しふ、ふりつきくさんしられ

はやくのこゝろなれくよなあしけてゆらぬく夜
のへとそしかをすくて、いかそこのとらみしへうへ
とそふらなくて、くもぬ山かりくりてあるもく
まうくりあるくて　廿三日のやのの付つり
よかんかすらゆるかめ　くりあるしいかめ
しくまひへかはもあるさあやのあかせれあこ
めひとくいうらよゝかのかそすうそらもらか
いふるとみをなふうくて三月れすられ良文よ
みやるなむうれみつまく右近少将をれつゝひり
てたいかくを常しかりまれとらへたとひ夜な
おうらはきこれたゆふりゆくるみあはし

ゐたりけるや

〔春宮〕
亭子のみかとしきりにしらせ給ひける程にや
からくもありける所にてたゞ中つかさの宮も
み給てうしろめたく思ひ給つゝおはしまし
さらんかくも哀しき御こゝろをかけ給ひける

春ごとに君のことをすぐさぬ我が袖さへ花のさかりかな

らんとしてうちしきりてすゝれぬかくよみてかへれ
給へるにはおほく見えけれて久しく思へ給はれつゝはかり
かねおもひさまねの女はさりけく一具給ふ源さいし
やうくらうして給

〔相実正〕
源さね正がせうとは〔を〕かの兵部卿のいひそゝの

〔中〕　〔実忠〕〔宰相〕

ちゝ御しとゞめて給へれとはしたなし。式部卿
おきあり

山ひともことさらに式よりとはすまはれ
らよひとりおはしまして日比のさとゝものかたりすさ
かうよなきみかれてまゐりおく家

あるまくおもかくれおもかりの流とてね
〔正明〕
名を見むとりまして平中納言より
おもふさ給ひのまことの世にふかく
物思ひしきみをもちゐらてはのかまへるにしみゆる
くるの世の給ひ給て
よしのかはみてぬれへて嵯峨の山のおもくそ

とよろぶ、とらへて給へまでとまへのうへに給はりたりの
すゞしきめもとの内のゆつひよるみれば、よ雨に海
てる夜は、ゆらしきまつよ、ゆとしらさふかられ
ろとれの枝すらし、ゆりてめでいまして、すゑよ
くゝれて
わく山よりて夜へうら人あられ花くまくらう
さなとさにれるくらみむとそふとて君まうれ君
よなまくゆらんをさせ給ひて、これ花給りてれ
給へまへゆかくし海とそしらゆまうりぬ、おそくえ
れ給へして、人くの中にことすゝしとゆかれ、人
をまはじくられつけて給

ゆうさとをうつしれの中に山岸の花をうつゝぬ山と
すしきてこまきさとらゑてうつゝ君すゝきくりつとも給
きら、ま、遊かねてうりもそしらぬいとそえ
んとなひししにらくたくゆほさいれん君のら
らうしなにりものゝくすうらむこのゝゆき
ゆくはわろしよりのみゝゆらく春もやまをよ
かりてあひとよのくらすゆかうてよしらゆりりて
ゆれわゆらしふすくゆみくわまてあすえあり
まうらきれぬ、ゆうしなやすきれりつくゝらう
まつさけゝり
ゆたひれそくよらのれつゆすくいゆえとくろと

ともにはてあそびしとて、いつあそびみよこれなる
のやうにありくまゐり給へとて、なそへまつる。おそ
なみ給ふ。おもむくつけみやうしきりのうれしそ。
のさともとひて、まうく給ふ。御祓の君
人々れぬ祓の川とゐるまとつくたまれ
なみなとさくへまへのうく給ふ。花ゆふまさうく
こともしこら
むつまれはなるとく給ぬりのすくいひあると
方ともすりぬへきられ。御前にすくなう給ふなる
らよおりしるこなおいふすうとのはくつきて、花さら
まうりみちさうるとよとのし給ふ。なやまま給ふ

ほたるのひかりすれとこのころなるところ
ゆうなかめてゆうそ。なやまもあそひ給ふ。ほのや
しくよの中ともうれしく給ふ事よてそあるに
かれ。これらなる川ちうそてすくさんとて、とおし
給ひ。花のみなはくしてさ給ひしまし。なりいのと
ことれそよ庭しまうりくゆりしろ。ほのよしの御と
とあやしくこなよくところなふそゆりしこと
なみなくらすとものとふく給ひとこうせらそれなる
給ふやとの給よ。水の方ぞすまなのちしぬされたる
人くなうしてまんせまえてしこふし給ふ。これを給ふもあそ
なみふかくもそとまうり給へて

はくりをすれ給はまよりこれくるまりも給
鶯の声もかよひてとしふるハ花すゝきさく
かよふらくし、あらく家
うらとて出給ふらむ鶯ハ月のかうこそ
秋ハあらてことにとおもて給ふ頃の御よろこひく
あやしくかくこゝろにくきものかなとまいりてめく
いそきまよふことをあらまほしく思ひのみ給ふいそ
出れ君も此かひ君とひとしくてあらはいかなる人
中ころにハいかゝあるへくもとゝ給たかね
これ思ふうれしくおそはまさに御色かれ給ひしれて
めつらしきよしてこひまさ給ひくふくしやるこそ

そなたしゆめいつよ思ひかくん殊こそ給へかし
少将さまふかくいつよりかくんまいらせこそ
給へしらてにいつくさも思ひ給ひさんとてそれ
より我くめらふすくひてそれと思ふとは
らしやうとる此給ぞ少将さましるとてうさ
あらんおもとあらもあらう給りこそはつめ
さあつてもらそはつらし見ゆ遣たまふ人にな
ふさう思しふんかくそれにさしうすりやらひ
いはまいいと遣くしやとそてすることをゆらして
うくの給
うつ世をかくのこあるらふしへとりまくさ

くふをおもひてこそるゝとてこの中ハくるまをあ
らぬ物なりさいつりのみしくせまふるゝふすとさ
ハ河のもとをんいつく宮あられ二人いとそ天下れあるくふ
そあるこらくあれむしはかなくてうしれとし月まそ
つく夜京のあつハしとこれ父ひとりあかきこりの
し給へくといは道人さし物くふひとうえし
はあまさらんくりしくれ思ひと一所よろりたり女
ひとりみつと見ハ為もあれと御代よしそくてあまこ
れそむうしらいみしうらしんさしいと給へるとき
あと給そこれくそやそれもうひとりとてあやとて
一とみのはく物語のくつり河りうしと浅ませ

[朱書：清こゝろもあ 一本清そともをトス]

もゑらしわたるゝこれ。よの絵ゆくことゝりや
あり御消息されとゆかしへゆかしこちらへさせとのえんよの
こしとぞ
とし父くうしをなされ源氏めも兵部卿宮ね
時々うらさとの絵くも得つる思ひよ
よられもうゑものありけんにもいあれ
めくらしとさとへうるんよいひつくみそのりとに
いそくわそ。いいせうれこしやまとこしく此ゑもいめ
らくあはせて筆しうきて紙ひくよれぞいとこと河ま
こまくうてき物とこともをあまそきりを思ふことく
むらしくなうゆれふとぞあきらて。いくめてのこ

[朱：筆] [朱：出居] [朱：簀子]

りはあまた人のかきたるさうしとも一こゝろねをりを
こゝろかれもうへ口人須よしあはせれもつ海お紀
あと見えるてくいそいり花のえたにわそひて。
いみしさいしそうかしていなしさかくの
あしてなる絵つくる文字の絵まうしにひさし
くもり絵かねとあしてをみしてうれしくにの絵
あなねいとしくまうくあめやとの絵へは我くる
かうしろ小まうれあつ不をりく御ちかあさせそ
あよなん花の絵へんとそいはふ絵御ちかあ須絵
みなとさいなてをいりまち絵うなそしてきあとん
しとうねちくうち絵なんなそく海くりきるふろそれ

[朱：右] [朱：妻]

とおしひなくてしていて夜のまひとりとおん
めくねなる。かんさひゆもみなまたくとこう
あし侍へいひきしあれことかるまゐのかの大将のめ
のとりとしおときこえす三宮をあまりし
とれを十七八人まりとて河をしいへるま
はなしさとうはあるたしんそのみことそれ
おほくはり残されふさよなかあり母よ
はむかしより河のぬてるくきこえし人
をいかてえんとおもひしをまつずるを
あし人まうく上総これ人のやまひあら
んとてかくせ給

月のことよりなるこそふりこ宮ゐめたふ
ふとし給ときくハ海のとかいとさの信をよ
けるをとし残いらてはるとかき給て左近おれ
なかよりまこきかれかはりれ家ととめすし
てかれかりはとくせよとおかせ給ふありしそ
まうてお車のをまきのこけるみれ中給るか
すみれ給ひるとのりて桂へまうて給ひみち
のあとあまいてくふあと心して給ひ旅れ
まかけるそなる所中川人まうけはさせよ
とのりてまうふほとりしおもしろき花もの
あなかりし御給み給けるに給かいれ

[illegible]まの[illegible]あらんは、あけ[illegible]れ
みれおろして、とふいてたゐふ、ことちみな
雨まいりぬかゝて[illegible]のこふ[illegible]
[illegible]けよもなく[illegible]人[illegible]花の
[illegible]らまいりぬれは
[illegible]とえ[illegible]えいり[illegible]を
[illegible]方[illegible]ふ[illegible]ひ[illegible]らちりて
とき[illegible]のまい[illegible]らんの[illegible]らんの[illegible]よも[illegible]
てや[illegible]ぬ[illegible]のなま
まあるして[illegible]れらかいとと[illegible]りゆくゆうそ
[illegible]せくまつ[illegible]れうつけ[illegible]よなりてれつ
うひのかねいそ[illegible]よ[illegible]くいいそ[illegible]人

てしそ[illegible]
いそくとも花よ[illegible]せんよ[illegible]
のうつくもえん、中より[illegible]はなそいひく
花のをと[illegible]てそ[illegible]めひとなくみわひよ
あく[illegible]れやくくんをけもみ
う[illegible]ちくもとと[illegible]桜花うけゆくる
よ[illegible]めくしさしめや[illegible]かすみしつれめ[illegible]
このやとに[illegible]花のいかる[illegible]はおつ[illegible]
[illegible]ゆきま[illegible]
松風[illegible]めや[illegible]とみしそれよかる
[illegible]の[illegible]かおか[illegible]よ[illegible]

[illegible]の田つ村[illegible]巻の[illegible]
[illegible]のまくかのたゐめひとり
[illegible]の下ニみる内[illegible]
[illegible]くてつまうすミト[illegible]

しやうしやうまのこゑんは、あけぬれ
みえおろして、とふしてた西ふ、こゝろちみる
内よりぬかくてひのこふ秋の、清とよの人た花の
うけよと思ふらうつゝらはふことゝらよいるれは
ゆくいとうみ人まりしく山路を深里を、えいりはつゝ
此方はふとをとん給くらしひまふさてうらりて
とものまいるか、みくらんのおしなちらんのきよいよき思
てや行く見いて行も哀しうへはしぬかりのなりま
まめるとして、よえらかいとゝうたれりすく汐うそ
うせくまつく夜、れうらうけうゑ山くよなりて、れつ
うひのかねいそ紀路よ、おとうくへいそ紀路、花鏡ん

道日 おふめいおさおぬニヤ

てしき西行をわとそ、かつくらか紀らとく
いそくとも花よ海らせんよかよ哀をうへゆくへ
のうつらとも思ん、中より紀おはるとて、いひく
花のうをとらくるてまらかめへひとなくみわひよ
あくまれやくらんをけちみ
うくみうちくきしと此月之桜花うけふくよ
よ我めくし、さくしめや、なかすみ
つくうこのやと此み白雨深く花のいかなる道はおつ深た
浅く色もとえ中らん、ゆきまさ
折り松風そ見きのくさ深やとりしそれとかる
ゆき深花のうらか郎、なか老ち、内ふくよ西き

しやうしやうまゐりてのちは、あけぬれば
みれおろしてゝとふしてたまふこゝちみる
日まいりぬかゝてれのこふ経ぬ、満ともの人よ花の
うけよも返くりまかせら行ふことよらよいうれいば
やく人まかりく此月さ留まで、えいり経つを
如方は小ことを人経くちくひまふそてうちいて
とそのまいりかまうんのれしきらんのさいよもをま
てや給く返いて侍らんしうへはりぬるのあま
もあるして、よれうかいことうぞりまくはつそ
うせくまつり候、れうつけるりくよなりてはつ
うひのかねいそ紀経よ、みとうくへいそ紀経、花経人

てしそ歌経ともわとそ、かつてうせ経とく
いそくとも花よ海のせんりおほえいろうやん
のうつらもさん、中よりが経へまてつく
花のうをとらむてさつめいとなくみおよ
あくまれやくりんをけさみ
うまつくちもそしゆり之桜花うけふくを
経めくてうつめや、おきさのえしめつうれめいるまも
うちうへをミれみやを結りいとれと十七八人
うるまてあるしをいうるれそくひとりよお
りさん、花のみことをわも経さうれんりてさ
よたちくきたりうはし、むしうきりのぬまる

尼ぬかはほどにゆかぬえしくなりぬいとか
ふこしとていそけハ。ふら肉を清返
ふるもく蕎麦やとはもゝ定ーしたふといへは
そこにて月見新ものゆきはとふえ給へく
あやかひねりの下ちまつかそ。それ鱠くし
とゆ女乃さうそくもくりかつけ給へそ
まゐりぬ。ことく人くと見給て。あやしあか
しても給と見てかゆり給ふ。おもしゆるな
る女のさうそくかつけ給へ。

ゐまうつりそめてあるなりけりのまゝもせさ給ふと
ののふれさよ。ありしにまさる花のえくまかつけて彼
のせうしやうつりなま人へはけしろみそしらぬ
ろこしより出まゐらするみるしら見入ねまう
このやうなめでたき花のつゆれハ此はるかし
　咲くも花とみるらんゆきまさ
松のせのひとさのられて座とふしをれとろふ
えけりなむのなかれ。おうとしらみくしぬとまり
ねかうかすまお将姫さうくるすりねとてうとあとと
ていふそきハこさこれなうしらの庭
ふる雲のたちるとものうちまて春れとえとなふ

四丁弁
以下不用
份考り
こゝら[illegible]内へ入ぬる
よつが打ぬるの此ヨノ行ニ
ヲハレリ
上藍字ナリ二下ワヤトノ間ノ于ノオラウニアリ 此于ハ是後人

とぬかはほどに少ね久しくありぬいとか
なこしまていひけれは、ふ方内外清返
そうゝ事をれやとはもうまし。たかいへは
そうにゝ月れ新もえ御色はとうえ騒く
あやかひねりのうちき一かさね、おうゐく
とゆ女乃さうぞく主とくうりかつけ給ひを
きあり。ぬをく人々とゝ見ん給て、あさひあか
して侍とみえてか鳥り給ふ。おゐしゆうな
る女のさうぞくかつけ給。

以下不用 四丁并ニ 份考

上 藍字カニトロトノ間ノ丁ノオクニアリ 此丁ハ其後ニ

れまうつそあるゝ宮へ。けのまゝをせさ給ふを
ののふれとよ。ゆりしろき花のえたをみつけて侍
のせうしやうまうちきみへはけしきみえしらお
ろしゝどり出るふみをしらみなしらし入ねるうすを

このやまはめえ人のる花のつまれいかはかなし
侍くもみとみえんゆきまさ

松かせのひゝきのうれしをそみしとれとるふ
きけるものうれ。すうくしらふくし御をとるり
ねうろりきよ。少将和うくすもりぬ。いてうらんと
ていそをいとうこれくしうれ起
ふく露れ袖そうもうまてさもれと之と見ふ

あうすみ
りが村
ヨリ十り

見ぬがほどにいぬへくありぬいとか
なしとていそけば、お方内裏清涼
殿のやとはもし参したるといへは
そのほと月の前も見ゆ出はとうそえ給ふ
あやかひねりのうちき一かさね、花の色く
れ女乃さうそくかつけ給ふそ
まきありぬをとくしをしとよ給てあか
して給とえてかゑり給ふおほしゆるな
る女のさうそくかつけ給ふ

はまへつたひある所もあけのまへをせき給ふを
のゝふれるふ。おもしろき花のえたにみつけて給
のせうしやうかうたなくへ。ほけきやうみをそらお
ろし、とり出まふなむみるかこいぬかまする
このやまにめく人は花のちるまいはゆくし
けくもなしとみゆかんゆきさまさ
ねかせのひとさのおれを屋ともをれともふ
ふけるなのえられ。すうらくらみくし夜をあかり
ぬかされりよ。少将もうしるつなぬ。いたうしと
ていうそをかいくこれかさらかれ庭
あつ家の方へもきて立はしえとまゐみ

八月のけしきあはれハいとをかしく侍く。おやのみ給
つきのころさひとこそわざと海へしまする女れいく
そくひとくらう。御出給。いとゞさまうめくて
とめ給く。おもひあしくて。伸しめたく思給よし給
しやなる女のさうぞくを御出給

のこさうしふあまこそてみていてゆかりくてかん
みとこらいてゆかりくのゑくへりはそ
さるしみるくりさ給七日の夜去りよ
ひいてきうくふいうめしくてこむのとけとれつ
うひゆく御弟とあるゆわ父は逃とうえまふ
右大将殿より前よりそくんの花ゐうそね大臣の
いぬまはけりさともろく給よひそてはそむつさ
みとうれいみとりくの行そくす給色り頭中
将ちうゆのいり参くさ打んなりくされは西い
れくともうれすらいりよもへくをまゐ給りは源氏
中将又さ海へく海まり内去文の殿ニ人の

これりのうくつてふさらはらめみとくらさる
くしりゆうくす御せんのとみふくううし二ゑて二百
平貴をゐへくゆわさ左右ひりよつれく右さは
歩うしも何つせく二百よ人いうり保らへくら
い貫中らく八三貫下らへ一貫つ給ひ夜ゐ
ようくひのしつまくこれんくらめみとくらち
わめなうりくこうよろ右大将の本。御そむつさそ
つそくくろ給くて大夫は大は弥のそろ給大弁殿
の内の方はちりけうくのとをのけくゆくらとのは
ふさ武者所大輔はめのし三人一人いろとむとそう
二人ながらはるむをとあはらりをふまうりぬ家の

心ぼそうしおあまさてみていかりてかん
しらめきとらこいとゆかりくりの給ひつ沖そ
はもつさるしみなうけさ給ふ七日の夜まよ
うらいこうふいうめしくてこむのとけとはつ
うひゆく兵衛とあ家ゆかり父は悲しとさうえまふ
右大将殿よりは前よさうとんの流ゐるかね大臣の
いぬをはけさともろく給よひそぞはぞむつさ
なとられいろことのかくす給角り浪中
将さるらのいうぬてさわれお子くされは西い
れきぞうれすひけよをく上ま給て源氏
中将又さ海へく海まう内義文は殿上人の

されりのうくつてぬさらかむせらめみとふらさぬ
しうゆくしす御せんのともをふつらうしこゝて二百
両千貫をおくゆかさたなおひけよつれくおされ
おうくしも給はせて二百よ人つうほらにしら
いぬ貫中ら下ら一貫つ給夜ひ
ようらひのしつくくされんうらめみとうち
わくめなすりくくまうかなおりのよ御うむつさそ
つくろ給くて大文は給の右とら給左大弁殿
の御の方はちけらくのとをれ共くゆくらとの
ふく式部大輔れめのし三人一人いらむしまとう
二人はなれむをおれらけをふ更の夜ぞの

ここらくしまれとおやとよろこみのまゝて或
大将り女九まもひ一宮しれるよ何らし二つ
うすれ此くらやられて、あくえしつされは大殿
さゝくをわらい、めのもとあらさわやれらとさ一う
さねあらさあやのもとくとえぬさつ、良夫の人さ
らよしらはよ人くのそてまうれまうりのとも、て
此あらく人くものゝふる文女御のとまつとも
のまうちら侍さしさう、或る大将かとまゝう奈
殿の帥方ならけりよ海つりさう、左衛門のせうら
のきまてうらてい也殿此えさろを起此さくして
のこうさゆまさこさくほのよまつう、あうらのの

一本五節トスルゾ是ナル

わすれたくて御後のまうて、御むすめ世の御後のこともけの
ゆくまうり給られ御まへにうらめみそしうら殿よ
人らなることよ此う、そあるうよ此けりこてれせあい
れくつてひしうらめれ此ゆくりいいゑ紙殿よ人ふ
侍よ八三帝大侍なよりいつけりけりぐられ文れ
れつひよ、此よの河のとあ給人くしら給つこと、
とれくの河をたり給へてかくて月日つくえよう
せらよ給てきれて、ゆつもとならよ海つり給ぬあ
又ら年の二三月もら文も給く此とみて
ゆまを給ぬ、れうしやすむそ給の此あてこと
あり、とうて給うて、きあまうりまうう給ぬうくて

阿女郎絡ことからられし

天明元丑九月廿一日圖南翁ノ本ヲ以テ當巻十九丁ルニデヲ挍合同九二日了　田中道丸

當巻十九丁ルヨリ以下他巻ニミダレ入ルヲ又圖南翁ノ本ト考合テ同十一月上旬挍合ス